

聖書：マルコの福音書 10：46～52

説教題：目が見えるように

日時：2026年2月8日（朝拝）

エルサレムに向かって最後の旅をしているイエス様と弟子たちは、今日の箇所でもエリコまでやって来ました。エリコはエルサレムに入る直前の町です。そして次回、11章1節からイエス様はついにエルサレムへ入られます。その直前の出来事を記したのが今日の箇所です。時は過越の祭りが近い頃でした。イエス様と弟子たちの他にも、巡礼のためにエルサレムへ向かう人々が多かったのでしょうか。イエス様の一行はエリコに着いた後、その群衆とともにエリコを出発します。その時、道端に座っていたのがティマイの子のバルティマイという目の見えない物乞いでした。エルサレムへ向かう敬虔な人々から施しを受けるためでしょう。彼はその場所に座っていました。その彼はナザレのイエスがおられると聞いて叫び始めます。「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください。」この叫びはこの後、信仰から出た叫びとして評価されます。ですから私たちはこの彼の叫びから学ぶべきであるということになります。ではこの叫びのどこに注目すべきでしょうか。一つは彼が自分自身を、救いを切実に必要としている者と認識していたという点です。その認識がなければ、イエス様がおられると聞いても叫び求めることはしなかったでしょう。彼はおそらくイエス様が様々な苦しみの中にある人や病人を癒やしておられるという噂は聞いていたのでしょうか。しかし自分はその方に何かしていただくほどの者ではないと思っていたなら、イエス様をそのままやり過ごしたことでしょう。けれども彼はそうしませんでした。彼は自分を、救いを切実に必要としている者だと捉えていました。だからこそ、イエス様が来られたと聞いて声を上げたのです。この与えられた機会を失ってはならない。私はこの方がくださる救いにあずかる者になりたいと願ってです。

そしてこの認識と結び付いていたのが彼の信仰です。彼は「ダビデの子よ」と呼びかけます。神はダビデに「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる」（Ⅱサムエル7章12節）と約束されました。これはやがて与えられるメシアに関する約束と理解され、ユダヤ人はメシアを指す表現として「ダビデの子」という言葉を用いていました。バルティマイもそのように用いたのでしょうか。そして重要なことは、彼はそのメシアは弱い者、貧しい者、抑圧された者を顧みてくださる方だと信じたことです。これも旧約聖書に示されていました。イザ

ヤ書 11 章 4 節：「正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。」 詩篇 72 篇 13 節：「王は弱い者や貧しい者をあわれみ、貧しい者たちのいのちを救います。」 バルティマイがこれらの言葉を具体的に知っていたかどうかは分かりませんが、メシアは苦しみの中にある者を憐れんでくださるという信仰は共有していたと考えられます。そうでなければ、こんな私が叫んだところで相手にされないと思ったことでしょう。しかし彼は信じたのです。ダビデの子、メシアなる方は憐れみに満ちた方であると。自分の手には何も無いが、憐れみを求めて近づいたら、その方は決して私を退けず、むしろ豊かに答えてくださると。そこで彼は「私をあわれんでください」と叫び始めたのです。

ところがこのバルティマイの叫びはここで妨害されます。多くの人々が彼を黙らせようとし、唯一のチャンスと思って必死に声を張り上げる彼の前に人々が立ちはだかり、「黙れ！黙れ！」と言って来る。もし彼が社会的に地位のある人であれば、こうはされなかったかもしれません。けれどもバルティマイは道端に座る物乞いでした。人々は「今はあなたに構っている暇はイエス様にはないのだ！今はエルサレムへ向かわれる大切な時なのだ。だから黙れ。もう言うな！」と押さえつけようとする。ここに人間のコミュニケーションの限界があります。どれほど必死に願っても聞いてもらえない。心の底から叫んでいるのに、「黙れ」と言われてしまう。しかしバルティマイはそれに負けず、「ますます叫んだ」と記されています。これによって彼の信仰が一層明らかにされることとなります。

イエス様を求める際に様々な障害が立ちはだかることはこれまでの記事にも見られました。中風の人が四人の友によって運ばれて来た時もそうでした。イエス様がおられる家まで来たものの、群衆が多くて中に入れず。そこであきらめてしまえば、それまでです。しかし彼らは屋根に上り、そこから中風の人をつり降ろして、イエス様のもとに近づきました。また十二年間、長血を患っていた女の人もそうです。汚れた者とされ、前から堂々と近づくことができません。でもあきらめずに、群衆に混じって後ろから、せめてイエス様の着物の房に触ることができればと近づき、彼女は恵みを受けました。会堂司ヤイロもそうです。イエス様を家に向かってお連れする途中、娘が死んだとの知らせを受けました。絶望の状況に置かれました。しかしなお信じ続けるように！とのチャレンジを受けました。またシリア・フェニキア生まれの女もそうです。異邦人である彼女は、最初は取り合ってもらえませんでした。それでもイ

イエスの言葉ににじむ恵みを見逃さず、なお食い下がることで祝福を得ました。ですから私たちの歩みにおいても、すぐに道が開かれないこと、色々な障害が立ちはだかることは、むしろ普通のこと、よくあることとさえ言えます。その中で私たちは本当に求めているのかどうか試されるのです。バルティマイはこのような障害の中でますます叫ぶことによって、自らの信仰を表しました。

そんな者にとっての福音が 49 節です。そこに「イエスは立ち止まって」とあります。人々はイエス様の歩みを妨げないようにと考え、先に進ませようとしていました。しかしイエス様は立ち止まってくださいました。そして「あの人を呼んで来なさい」と言われました。人々はバルティマイの心の叫びを聞き取ることができませんでしたが、イエス様はその叫びを聞き取ってくださいました。この時、イエス様はエルサレムに御顔を向け、弟子たちの先頭に立って進んでおられました。間もなくご自身が受ける十字架の苦しみを見据え、深い戦いを覚えながら歩いておられました。そのようにご自身のことで心が一杯になってもおかしくない時にも、イエス様は私たちの叫びに聞き、立ち止まってくださる方です。イエス様は前回、「仕えられるためではなく、仕えるために来た」と言われました。そのような方として、どんな人に対しても仕える方としてご自身を差し出してくださいます。バルティマイが物乞いだからと言って軽んじることはなさいません。「あの人を呼んで来なさい」と言われます。すると人々の態度は一変し、バルティマイに「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたを呼んでおられる」と伝えます。これを聞いたバルティマイは「上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た」とあります。彼にとって大切だった一枚の外套さえも投げ捨て、喜びをもってイエス様のもとへ向かいました。この方が私に向き合ってください。この方によって私は癒やしていただける。その確信を抱いてイエス様の前に立ったのです。

そのバルティマイにイエス様はこう言われました。「わたしに何をしてほしいのですか。」 イエス様は彼の願いが分からなかったのでしょうか。そんなはずはありません。この問いはバルティマイが自分の口で信仰を言い表すためのイエス様の導きでした。人は信仰を告白して恵みを受けるとというのが神の定められた方法です。これに対してバルティマイは言います。「先生、目が見えるようにしてください。」自分が本当に願っていることをはっきり口に出して願うのは実は簡単なことではないと思います。もし願って、かなえられなかったなら、かえって深く傷つくことになる。そう

思えば、最初から言わない方がましだと感じることもあります。それよりはまだかなえてもらえそうな、より小さなことだけを願うという誘惑もあります。しかしバルティマイはそうしませんでした。彼は自分が切に願っていることを率直に、幼子のような信頼をもって「目が見えるようにしてください」と願ったのです。これに対してイエス様は言われました。「あなたの信仰があなたを救いました。」この言葉は5章34節で十二年間長血を患っていた女の人に語られた言葉と全く同じです。これはもちろん私たちの信仰に救う力があるという意味ではありません。救う力はただイエス様のみあります。大切なのはそのイエス様により頼むことです。バルティマイはこの祝福を受けるために何かを持って来たわけではありません。彼がしたことはただ恵みを持っておられるイエス様を信じたこと、ただそれだけです。そしてそれで良いのだ、その信仰が救いを受けるに十分であるとイエス様は告げてくださったのです。

イエス様はなぜ彼の目が見えるようにすることができたのでしょうか。それは単にイエス様が神だからということではありません。イエス様がこのような恵みを与えることができるのは、前回の45節で語られたように、私たちに代わりに十字架上で贖いの代価を払ってくださるからです。それによって私たちの上に重くのしかかる罪の呪いを取り去り、神の国の祝福に生かしてくださるのです。メシアはそのような方として、目の見えない者の目を開く方としてイザヤ書35章5節でこう言われていました。「そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。」救い主なるお方は、こうして神が本来意図された良い状態への回復へと私たちを導いてくださる方です。

しかしこのことは今日の私たちもイエス様を信じれば、あらゆる病気や肉体の問題がすべて、この世で解決されるということを意味しません。主は癒やす力を持つお方として、御心に従って、奇跡的な癒やしを行うことができますが、常にそうされるわけではないことは、あのパウロの「三度の祈り」を思い起こせば明らかです。彼には肉体のとげと呼ばれる苦しみがあり、それが取り除かれるように繰り返し願いましたが聞かれませんでした。むしろ主からの答えは「わたしの恵みはあなたに十分である」でした。「その苦しみがあっても、あなたはわたしの十分な恵みに生きることが出来る。むしろそれを通して、より深く恵みに生きることが出来る」という招きでした。あのパウロでさえ祈っても癒やされなかったのですから、信仰があればすべての病が癒やされると言うことはできません。逆にもし常に癒やされるなら、人はいつまでも

死ねず、永遠に天国に行けないという矛盾にもなってしまいます。私たちの希望はこの地上にあるではありません。聖書に記されている癒やしは、イエス様の来臨によって神の国が地上に現れ始めたことを示す一種のデモンストレーションであり、私たちがここでそれを受け取るかどうかは神の最善の御心に委ねるべきことです。それにイエス様はここで「あなたの信仰があなたを救いました」と言われました。この「救い」という言葉は、肉体的な癒やしだけでなく、霊的な救いをも含む言葉です。イエス様があえてこう言われたのは、肉体の癒やし以上の霊的な救いに大きな重点を置いておられるからでしょう。私たちが肉体的な癒やしをこの世で受けるかどうかについては主の最善にお委ねしつつ、主への信仰を通して霊的な救いを確かに受け取ることができます。バルティマイもその祝福を受け取ったのです。

彼はこうして目が見えるようになり、「道を進むイエスについて行った」と最後の52節に記されます。癒やしを受け取って、すぐに去るのではなく、イエス様のもとにとどまり、従ったのです。願うものだけ受け取り、あとは離れるのではなく、イエス様の後について行くという信仰の歩みへ進みました。ここに真の救いを受け取った人の姿があります。

以上のバルティマイの記事は、イエス様がエルサレムに入城される直前の記事であり、これまでの弟子に関する一連の教えのクライマックスに当たる記事だと言われます。イエス様は10章15節で「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません」と言われましたが、まさに子どものように神の国を求め、信じ、救いを受け、イエス様に従って行った人の姿がここに 있습니다。救いにあずかる模範的な人の姿があります。その一方でこの間にはイエス様から離れて行った人もいました。その代表は金持ちの役人です。彼は地位も名誉も財産も持ち、自分では道徳的に立派に歩んでいると自負していた人でしたが、その彼は結局イエス様に従わず、救いにあずからない人となりました。それと対照的に何も持たない物乞いのバルティマイが救われ、イエス様について行きます。「何も持たない彼の方がイエス様に従いやすかったのではないか」とある人は考えるかもしれませんが、そこには霊的真理があります。イエス様はだからこそ「金持ちが神の国に入るのは難しい」と言われたのです。多くを持つ人は自分の本当の窮乏に気づきにくく、自分の力で生きていけると錯覚します。一方、何も持たない人は、神のあわれみに頼らなければ救われないことをより自覚しやすく、そういう人は真剣に救いを求め、神が差し出しておら

れるあわれみに、子どものようにすがり人となります。そしてその信仰があなたを救ったと言われる人となり、イエス様について行くのです。まさにその見本とも言える人がここに記されたのです。

この記事に照らして私たちはどうでしょうか。まだこの救いにあずかっていない方は、このバルティマイのように主を呼び求めるべきです。人々はそうでなくても、イエス様は私たちの心の叫びを聞き、それを受け止め、そのために立ち止まってくださる方です。ヨエル書 2 章 32 節に「主の名を呼び求める者はみな救われる」とある通り、主の名を呼ぶなら誰でも救われます。反対に主の名を呼ばなければ、主はそのまま先へ進んで行かれるかもしれません。だからこそ私たちはたとえ妨げがあっても、主の名を呼び求めたいのです。その叫びに答えてくださるイエス様によって、真の救いへ導かれる者になりたいのです。

またすでに信仰を持っている方々にとって、この箇所は何を教えているのでしょうか。それは私たちも彼と同じように、ただ神のあわれみによって救われた者だということです。私たちは決してバルティマイより上に立つ者ではありません。私たちも神の御前で霊的に破綻し、窮乏のただ中であつた者でした。自分で自分を救うことができな、どうしようもない者でした。そんな者が、ただあわれみにより、救われました。私たちはこのバルティマイの救いの物語に自らを重ね合わせて神に感謝をささげるのみです。そのような者として、私たちも道を進むイエス様について行くべきことを改めて教えられます。そして私たちは主が示された愛と憐れみを感謝して、自らもその主を映し出す者でなければ！と思わされます。主のもとへ来ようとするどんな人をも妨げることがないように。貧しい人、抑圧されている人、人生の重荷につぶされて叫んでいる人を軽んじたり、脇へ押しやることがないように。むしろ主がしてくださったように、そうした人々に心向け、恵み深い主を証しする者でありたいのです。私たちの目を開き、神の国の祝福に生かしてくださるイエス様の恵みにともにあずかりつつ、御国の完成の日に向かってイエス様とともに仕える者たちとして歩ませてくださいたいと願うのです。